

船舶・航空機の入港推移

1 船舶

財務省貿易統計「船舶・航空機統計」によれば、北九州港（門司港・戸畑港の計）の船舶入港隻数の推移は図-32 のとおりである。2024 年は 3,319 隻となり、全国（89,573 隻）の 3.71%を占めている。このうち門司港は 2,100 隻、戸畑港は 1,219 隻であり、九州経済圏内の港では、それぞれ 3 位と 6 位になっている。

北九州港の入港隻数は 2012 年の 4,954 隻をピークに減少が続いている。近隣の他港でも減少傾向にあるが、北九州港は特に近年の減少幅が大きい（図-33）。

直入港隻数（入港隻数のうち、外国港から国内の他港を経由せずに直接入港する隻数）は 2011 年の 1,612 隻をピークに減少傾向で推移しているが、2024 年は前年から増加し、779 隻となった。2024 年の直入港の比率は 23.5%であり、これは博多港、大分港、徳山下松港など近隣港の同値と比較して低い（図-34）。

九州経済圏の入港隻数上位港（2024 年）

順位	港	入港隻数
1	博多港	2,734
2	下関港	2,265
3	門司港	2,100
4	大分港	1,664
5	徳山港	1,381
6	戸畑港	1,219
7	志布志港	680
8	岩国港	523
9	荻田港	491
10	伊万里港	453

図-32 船舶入港隻数の推移（北九州港）

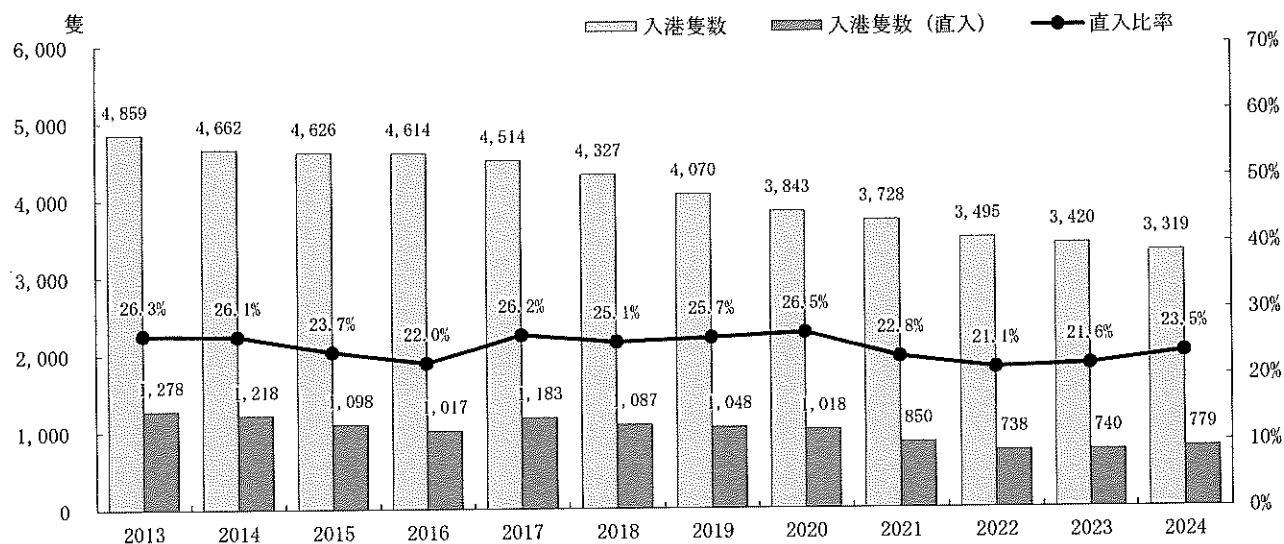


図-33 船舶入港隻数（近隣港との比較）

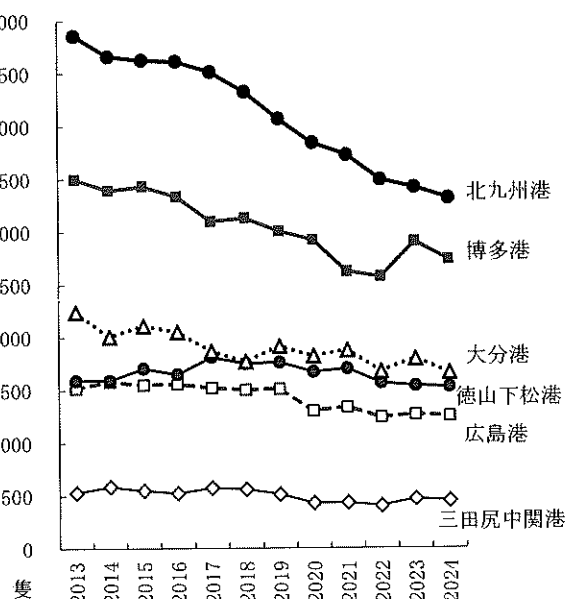
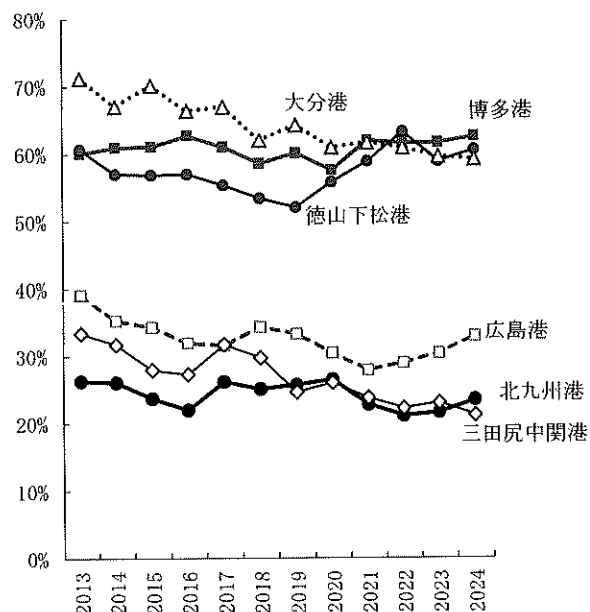


図-34 直入港比率（近隣港との比較）



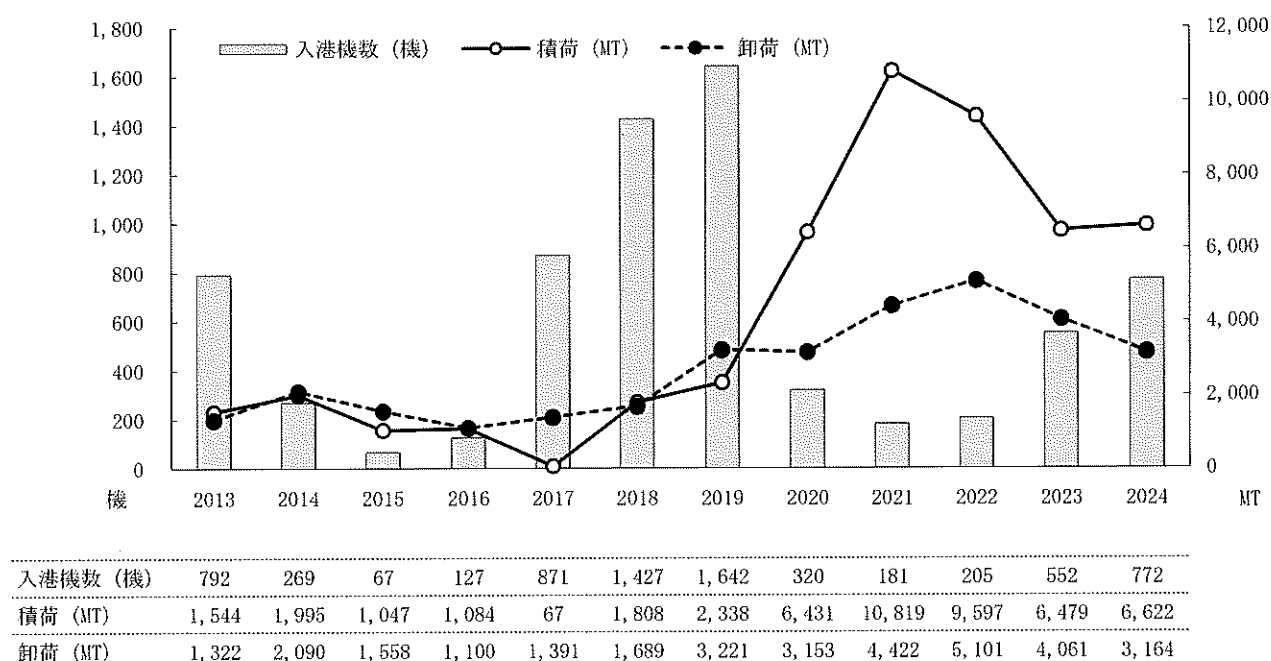
2 航空機

北九州空港の航空機入港機数は、インバウンド需要による韓国路線の増加を背景に、2016～2019年にかけて大きく増加してきた。しかし、新型コロナウイルス感染症流行により国際旅客便の多くが運休となったことで同数は2020年～2021年にかけて大きく落ち込んだ。その後、出入国条件緩和や、新型コロナウイルス感染症の5類感染症移行により2022年、2023年はそれぞれ前年比13.3%、169.3%増と回復した。2023年5月に復活したソウル便が継続して運航しており、2024年は前年比39.9%増の772機となった。

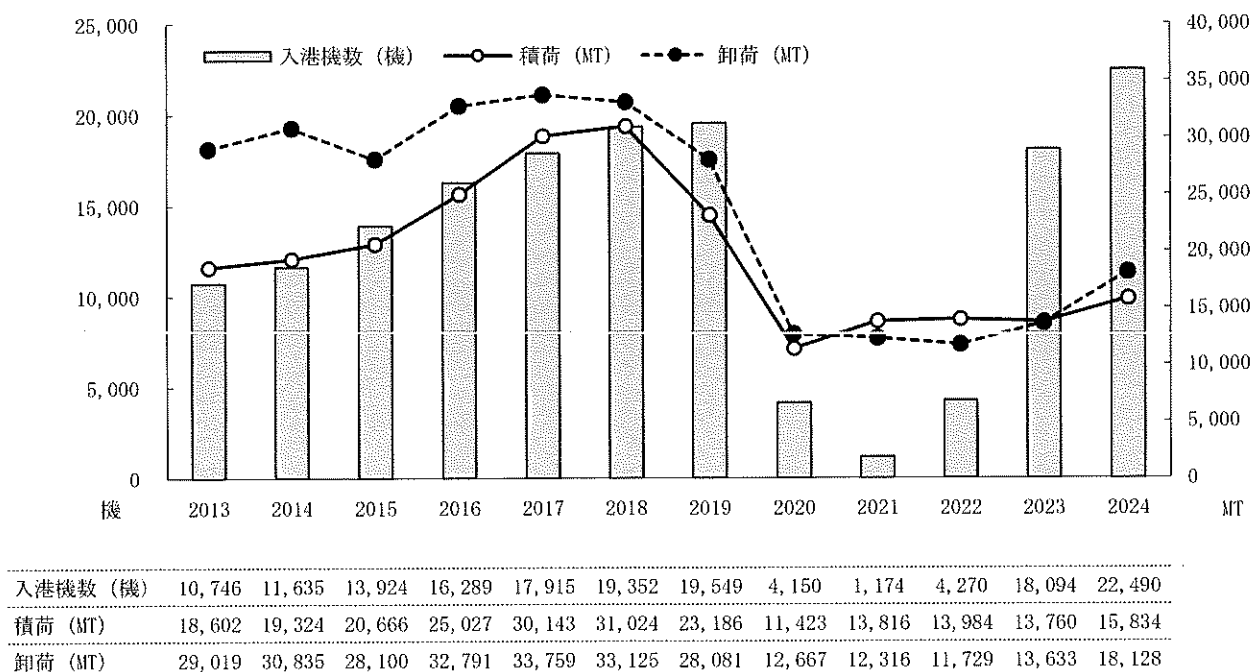
北九州空港の積荷は2024年で前年比2.2%増、卸荷は同22.1%減であった。北九州空港では、コロナ前から積荷・卸荷量が上昇傾向で、コロナ禍の巣ごもり需要などを背景に積荷は2021年には過去最高になったが、2022年以降は減少傾向にある。しかし、2023年2月に就航した米国物流大手UPSの貨物定期便などの後押しがあり、積荷、卸荷ともにピーク時から減少傾向にあるものの、コロナ前に劣らない水準を保っている。

近隣の福岡空港では、2024年の入港機数は前年比24.3%増の22,490機となった。積卸量について、積荷は同15.1%増、卸荷は同33.0%増であった。

図－35 航空機入港機数・積卸量の推移（北九州空港）



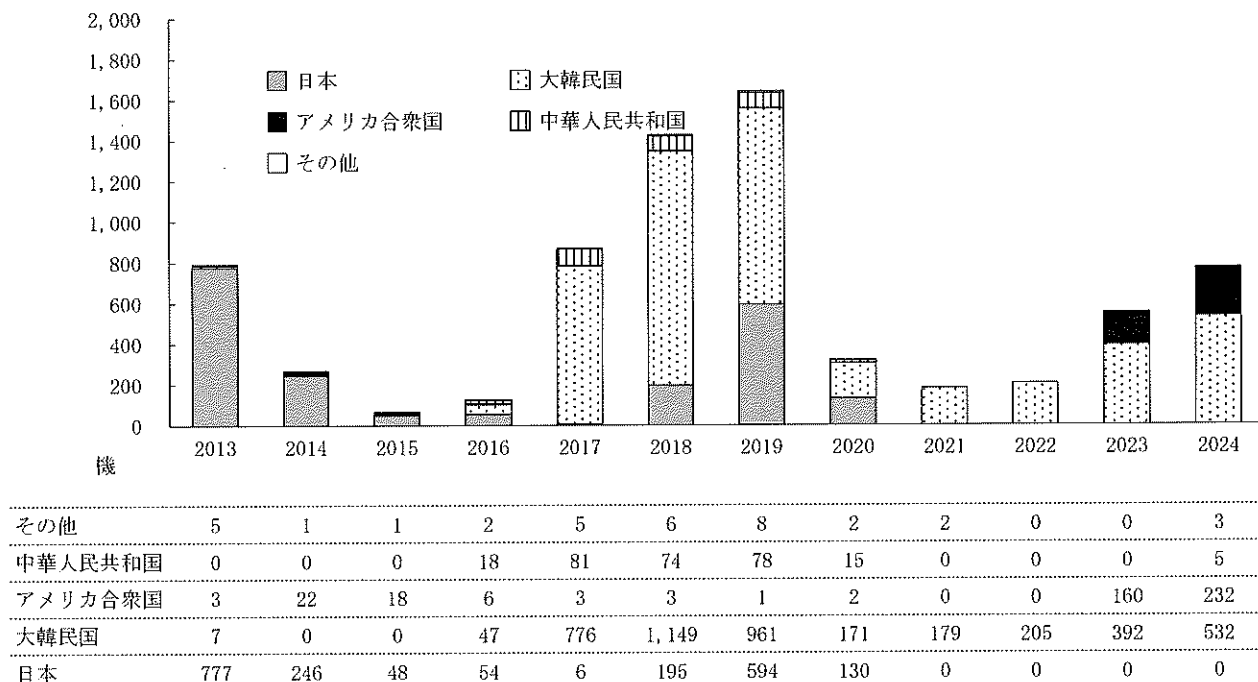
図－36 航空機入港機数・積卸量の推移（福岡空港）



北九州空港における入港機の国籍内訳は、年により大きく変動してきた（図－37）。2020 年までは日本国籍機が比較的多く、福岡空港を上回る年もあったが、2021 年以降は全ての入港機が外国籍となっている。入港する外国籍機の最多である韓国国籍機は 2019 年の日韓関係悪化、2020 年のコロナ禍により大幅に減少し、現在もピーク時の 2018 年比で半分に満たないものの、2021 年以降は回復傾向が続いている。次点となるアメリカ合衆国籍機も、2024 年は前年比 45.0%増となっている。また、2021 年以降入港の無かった中国籍便は、2024 年 1 月に運行再開したものの、2月以降再度運休したため、全増の 5 便となっている。

なお、近隣の福岡空港ではインバウンド客の増加に伴い便数も大きく増加し、2024 年の入港機数は 22,490 便、2019 年比で 15.0%増と、コロナ前を超える水準に達している。

図－37 航空機の国籍別入港機数の推移（北九州空港）



図－38 航空機の国籍別入港機数の推移（福岡空港）

